

# 見よ！幻想的渡瀬体制を！

正印大の筆で書きたる

一昨日の全学団交は我々にとっていかなる意味を持つのであろうか。我々は自ら一その意味を問いつつ、そしてその中で我々は、次の新たな闘争を展望してゐるに違ひない。

我々にとっての闘争とは何であらうか。それは積極的、能動的であり、正に主体的なものなのだ。闘争とは、我々にとっては自らの「生の表現」であり、不断に自己変革を自らに強いるものだ。それ故に我々は日常的な日々の中の別個の闘争に支して無視しえないし、又それらとしては全人民的な政治闘争の戦陣性と大衆性は決して展望し得ないであらう。しかし日常的闘争は、その極限まで押し進めることによつて始めて、全人民的闘争との融合を切りつくり、又それ故にそれは全人民的闘争を抜きにしては語れないのである。

今日、我々は極めて困難な状況に置かれてゐる。東文、日大闘争を端緒とする全学口争の嵐は、口文協路線に象徴される今日の文書の現勢を赤裸々におびき出し、それ「体制」の根底的な変革を主張するものなのである。しかし我々に対する専制力の村能動隊を先取とする。斗争性殺は想像を絶するものであつた。それの象徴を「渡瀬」に於けることなる。我々はこの事を決して忘れねばならない。

そして、そのような状況は、一この世においても、10、4以来、具体化されてきた。渡瀬を頂点とする工学当局は、留置下において、授業用紙を強奪的に我々に強いてきた。それは物理3回生にみられるごとく、我々の自治活動をも否定するものであつた。それは医学部において、ますます看護婦の強制的配置転換、あるいは、厚生労働に対する彼らの強制的な態度に、するにそのエッセンスをあらわし始めてゐる。そして、そうした事は、その口文協を曝露するに過ぎない。我々は、これもや、渡瀬体制の幻想性を認識したのである。

全市工の学生諸君、渡瀬をはじめとする権力者のこうした数々の弾圧に屈服する事なく、弾固たる斗を創り出さねばならぬ。自らの思想的変革を何に求めるのか。まさに斗争の中せしか、我々はそれを見出しねばならぬであらう。学生諸君、幻想的渡瀬体制を打破すべく、斗を創出せよ。我々は一切の妥協を排して斗を打ちぬばならぬ。

全市工の学生、留置生、教職闘争諸君、

12月20日、学生長船議会の団交を、

再度、結集し、楠木部部長退任を

渡瀬体制崩壊、打破を勝ちとせよ。

と学生共々同志と団交するの道標を

# 連続数学実人